

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12345

研究課題名（和文）中国文化大革命のフレーム分析

研究課題名（英文）Framing Analysis of the Chinese Cultural Revolution

研究代表者

谷川 真一（Tanigawa, Shinichi）

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：40410568

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国文化大革命（文革）の集合行為/集合的暴力をフレーム分析の手法を用いて明らかにすることを目的とした。主な研究成果は、以下の通りである。

（単著論文）「陰謀論としての継続革命論、そして文化大革命」、石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所、2020年。（単独報告）「文化大革命の派閥抗争とは何だったのか」（慶應義塾大学東アジア研究所講座「歴史のなかの中国社会—疎外と連帯」2023年6月）（単著論文として同講座の論文集に掲載予定）；（単訳書）アンドリュー・G・ウォルダール著、谷川真一訳『脱線した革命—毛沢東時代の中国』ミネルヴァ書房、2024年3月。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来文化大革命（文革）の研究は社会構造や政治過程からのアプローチが主流であったが、本研究はフレーム分析の手法を用いて、文革の集合行為・暴力の認知プロセスに焦点を当てることを目的とした。

上述の研究成果のうち、単著論文（「陰謀論としての継続革命論、そして文化大革命」）は、陰謀論的フレームが文革の集合的暴力の一因となったことを明らかにした。また、紅衛兵・造反派の新聞をデジタル化・データ化したことは、広く今後の研究に役立つであろう。招待講演（「文化大革命の派閥抗争とは何だったのか」）や単訳書（ウォルダール『脱線した革命—毛沢東時代の中国』）は、研究成果を社会に還元する上で意義があったといえる。

研究成果の概要（英文）： This research aimed to shed light on the cognitive processes of the collective action/violence of the Chinese Cultural Revolution. Primary achievements are the following:

(Single-authored article) "The Theory of Continuing Revolution as a Conspiracy Theory and the Cultural Revolution," Yoshihiro Ishikawa, ed., Humanities Studies on Mao Zedong, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2020; (Lecture) "What Was Factional Conflicts of the Cultural Revolution," Chinese Society in History--Alienation and Solidarity, Lecture Series of KEIO Institute of East Asian Studies, June 2023; (Single translator) Andrew G. Walder, Dassen shita kakumei--Mou Takutou no Chuugoku, Minerva Shobo, 2024.

研究分野：中国政治

キーワード：文化大革命 中国 フレーム分析

## 1. 研究開始当初の背景

中国文化大革命の集合行為に関する研究は、これまで主に紅衛兵・労働者造反派の派閥抗争に焦点を当てたものが多かった。1980年代から90年代にかけての研究は、派閥抗争の原因を文革以前の社会的亀裂に求め、幹部子女や共産党員・活動家(「積極分子」)などの現状維持勢力と中間層子女や一般労働者などの現状打破勢力との争いであったとする「社会的解釈」(social interpretations)が多くを占めていた(Chan, Rosen, and Unger 1980; Walder 1996)。2000年代に入り、新たな資料の登場によってこの見方は大きく修正されることになる。新資料は、主要なアクター間の相互行為や歴史的偶発性(historical contingency)といった政治プロセスを詳細に跡付けることを可能にした結果、文革の派閥抗争は既存の秩序をめぐる現状維持勢力と現状打破勢力との争いであったとする見方に疑問が呈されるようになり、より実態に即した政治プロセスの描写が行われるようになった。

文革の派閥抗争に関する研究は、文革以前の社会構造から「創発的」(emergent)な政治プロセスへと焦点が移るとともに、確実にその実態の理解は深化してきたといえる。その一方で、行為主体の文革の集合行為への意味づけや派閥集団のアイデンティティ形成といった集合行為の認知的側面についての研究はまだ本格化していない。これまで紅衛兵(中高生、大学生)や造反派(大学生、労働者、党・政府機関幹部など)といった文革のアクターは、彼ら(彼女ら)の社会的地位から推定される各々の利益に基づいて行動しているか(「社会的解釈」)、社会的相互行為や歴史的偶発性のなかで意識決定を行なっているとされてきた。ここでは、集合行為は社会構造や政治プロセスといった外部要因に規定されるものとみなされ、アクターの内的な意味づけのプロセスは直接考慮されていない。換言すれば、アクターのエージェンシーの問題が十分に考察されてこなかったといえる。文革の行為主体は集合行為への参加をどのように意味づけ、どのような派閥アイデンティティを基に激しい派閥抗争を行っていたのか、また彼ら(彼女ら)はどのような意味体系をもとに暴力行為に加担したのか。いうまでもなく、このような「問い」は社会運動・集合行為論の研究成果から導き出されたものである。したがって本研究は、単に文革研究のみならず、社会運動・集合行為研究にもより普遍的な学術的貢献を行うことを視野に入れている。

## 2. 研究の目的

本研究は、中国文化大革命の集合行為をフレーム分析の手法を用いて明らかにすることを目的とするが、これはすなわち、文革という具体的・歴史的な事象を社会運動・集合行為論の主要な分析概念である「集合行為フレーム」(collective action frames)を用いて明らかにしようとするを意味する。このように文革に社会運動・集合行為論の分析概念を意図的に応用する試みはまだ数少ない。したがって、これが本研究の学術的独自性の一つ目である。

また上述のように、これまで文革の集合行為については当初、研究者の関心が派閥抗争と社会構造との因果関係に集中し、その後次第に焦点が政治プロセスへと移ってきたが、認知的側面に関してはいまだにほとんど研究が行われていない。このように、文革の集合行為の認知的側面に焦点を当てる点が、本研究の二つ目の独自性であり、創造性でもある。

三つ目に、(とりわけ毛沢東の)文革のイデオロギーに関しては政治思想史の面からこれまで少なからぬ研究が行われてきたが、ここでの「集合行為フレーム」とは「イデオロギー」とは異なる概念であることを指摘しておきたい。後述するように、ここでは エリート・レベル、ローカル・エリート・レベル、社会アクター・レベルの3つのレベルに分けたうえで、これら各レベル間の相互行為を通じて構築される集合行為フレームを分析対象としている。したがって、従来のレベルでの「イデオロギー」や「思想」についての研究が単方向的、静的であるのに対して、「集合行為フレーム」の研究は双方向的、動的な声質をもつ。このように、従来から関心を集めてきた文革のイデオロギーではなく、アクター間の相互行為を通じた意味構築のプロセスに焦点を当てる点が、第三の独自性・創造性である。

## 3. 研究の方法

本研究は、文化大革命の集合行為をフレーム分析の手法を用いて明らかにしようとするものであるが、文革の集合行為という場合、具体的には主要な争点となってきたのは派閥抗争と集合的暴力の問題である。文革運動の動員や拡散のプロセスは、政治指導部が公式に紅衛兵・造反派運動を奨励・扇動し、公安警察・軍による取り締まり・弾圧を禁止し、さらには全国に運動を拡散するための手段を提供したことから、争点にはなりにくい。むしろ、研究者の間で長年議論となってきたのは、運動の動員・拡散後に遍在化した紅衛兵間・造反派間の派閥抗争と集合的暴力の問題である。本研究は、文革の派閥抗争と集合的暴力を共に研究の射程に入れているが、これらにはそれぞれ異なる政治プロセスと意味づけが関連していると考えられる。そのため、3年計画

とした本課題では前者の派閥抗争のみを研究対象とし、後者の集合的暴力に関するフレーム分析については、本課題終了後に改めて課題申請を行うつもりである。

前述のように、文革の派閥抗争については、これまでに社会構造に原因を求める研究と政治プロセス・相互行為の中での意思決定に原因を求める研究の蓄積がある。ここでは、従来の研究成果の上に、文革の派閥抗争の認知的側面についての新たな知見を加えることを目的としている。それに際して、本研究ではフレーミング・プロセスを エリートの発する大衆動員のための支配的フレーム (dominant frames) と、 支配的フレームを民衆に伝達する際にローカル・エリートによって再構築される媒介フレーム (intermediate frames) 民衆レベルの紅衛兵・造反派リーダーによって構築される運動フレーム (movement frames) の3つのレベルの分けただうえで、ここでの分析の焦点は と 、 と の間の相互行為、そして のレベルでの派閥集団間の相互行為に置かれる。

上記の と の相互行為から生まれるフレーミング・プロセスは、中央の政治指導部が発する支配的フレームを地方幹部が地元の状況に応じて再構築していく過程である。たとえば、中央指導部が党内の「走資派」(資本主義の道を歩む実権派)と「反動的学術権威」を共に打倒せよ、と呼びかけた際に、地方幹部は自らの身をも守るために「反動的学術権威」の打倒を強調する内容に再構築するといったことが考えられる。 と の相互行為によるフレーミングは、とりわけ1967年初めの「奪権」闘争以後の地方軍司令官と派閥組織との関係や、「革命委員会」(地方党・政府機関が奪権されたのちに樹立された新たな地方政府であり、多くの場合地方軍司令官が権力を掌握した)の下での暴力的弾圧を理解する上で重要である。最後に、 のレベルにおける派閥組織間の相互行為から生まれるフレームの分析は、派閥抗争の原因を明らかにする上できわめて重要である。

以上の分析のための資料は、主にa)毛沢東の著作や講話を収録した『毛沢東選集』(全5巻)、『毛沢東文集』(全8巻)、『建国以来毛沢東文稿』(全13巻)、『毛澤東思想万歳』など、b)陝西省の主な紅衛兵組織・労働者造反組織が発行した新聞、を利用する。a)は、以上の のレベルの分析に必要となるが、いずれもすでに申請者か、申請者の所属機関である神戸大学図書館が所蔵している。b)は申請者が科研費基盤研究(C)「抗争政治論アプローチからの中国文化大革命の研究」(2014~16年度)で収集した新聞130部に加え、京都大学人文科学研究所が所蔵する文化大革命資料(鱒沢彰夫氏寄贈)を使用する。

#### 4. 研究成果

主な研究成果は以下の通りである。

(単著論文)「陰謀論として継続革命論、そして文化大革命」、石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所、275-302頁、2020年。

(講演記録)「(特集：中国共産党の「百年」を考える)文化大革命期」『中国研究月報』第884号、2021年、7-10頁。

(単著研究ノート)「アンドリュー・ウォルダーと文革研究の現在」『現代中国研究』第47号、2021年10月、44-51頁。

(招待講演)文化大革命の派閥抗争とは何だったのか、慶應義塾大学東アジア研究所講座「歴史のなかの中国社会 疎外と連帯」、2023年6月(近く論文集として刊行予定)。

(単訳書)アンドリュー・G・ウォルダー著、谷川真一訳『脱線した革命 毛沢東時代の中国、ミネルヴァ書房、2024年。

は、文革の暴力拡大のイデオロギー的背景となった毛沢東の「継続革命論」を、陰謀論的テーマを軸に、スターリンの「社会主義下の階級闘争」との関連から考察した論文である。この陰謀論的テーマが文革の集合的暴力に認知フレームを与えることになった。

は、『中国研究月報』誌が主催した中国共産党創設100周年を記念するシンポジウムでの講演記録である。

は、文革研究の先駆者であり、研究協力者でもあるアンドリュー・ウォルダーの最新の研究動向を招待した研究ノートである。

は、文革研究の最も重要な問いの一つである派閥抗争について、最新の研究動向を一般市民にわかりやすく紹介した講演である。講演の内容は、近く論文集として刊行される予定である。

は、毛沢東中国および文革に関する研究を常にリードしてきたウォルダーが手がけた最初の一般読者向けの著作を翻訳したものである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷川真一	4. 巻 2020
2. 論文標題 陰謀論としての継続革命論、そして文化大革命	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川禎浩編著『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所	6. 最初と最後の頁 275-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷川真一	4. 巻 第47号
2. 論文標題 アンドリュー・ウォルターと文革研究の現在	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代中国研究	6. 最初と最後の頁 44-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷川真一	4. 巻 第884号
2. 論文標題 文化大革命期（特集：中国共産党の「百年」を考える）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 谷川真一
2. 発表標題 劉少奇派とは何であったのか
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究班「20世紀中国史の資料的復元」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷川真一
2. 発表標題 文化大革命期（特集：中国共産党の「百年」を考える）
3. 学会等名 中国研究所シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷川真一
2. 発表標題 毛沢東と集団指導制 政治局・政治局常務委員会制度を中心に
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究班「20世紀中国史の資料的復元」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷川真一
2. 発表標題 文化大革命の派閥抗争とは何だったのか
3. 学会等名 慶應義塾大学東アジア研究所講座「歴史のなかの中国社会――疎外と連帯」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷川真一
2. 発表標題 毛沢東の個人独裁と大躍進 指導者の年譜類からの考察
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究班「20世紀中国史の資料的復元」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アンドリュー・G・ウォルダール著、谷川真一訳	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 536
3. 書名 『脱線した革命――毛沢東時代の中国』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------